
ついに俺も幻想入り！

九十九

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ついに俺も幻想入り！

【Nコード】

N4054U

【作者名】

九十九

【あらすじ】

この物語は平凡な少年が幻想入りして、刀の付喪神を相棒とし、幻想郷の住人たちを巻き込んで笑いあり、バトルありのドタバタ劇です。

処女作なのでひどい駄文です。過度な期待はしないでください。

それでもよろしい方はゆっくり見ていてね！！

プロローグ

もし自分が他の世界に行ったら：

なんていうのは誰でも1回は考えた事があると思う。

そっちの世界では自分はすごい能力持っていて、すごいかわいい女の子にモテモテで、その世界を救うようなドデカいことをする。多少違いはあると思うが大体みんなそんな感じだと思う。

俺もそうだった。

ヒマな授業中昔はそんなことばっか考えてた。

しかし、それも大人に近づいて来るとだんだんそんなこと考えるも馬鹿らしくなってきていた。

そんなのあるわけねーじゃん…とマンガやアニメを見ても昔みたい
に感情移入できなくなっていた。

大学生1年生になるころには、そういう熱いジャン○的な展開より
君に○けのようなリア充展開を求めるようになっていた。

そんなそんなどこにでもいそうな少年、俺こと鶴岡出海は、まさか
あんな体験をすることになるなんて思いもしていなかった。

この話はそんな1人の少年がすこし、ほんの少しだけ成長する。

それだけの話。

プロローグ（後書き）

自分にもできると書いてみたが大変すぎる…
書いている人たちに尊敬します。

第一話「肝試し」(前書き)

さっそく前回ミスしまくった。
今回はだいじょうぶかな？

第一話「肝試し」

ことの始まりは大学生生活初の夏休みに入ってちょうど2週間がすぎた頃、

「なあ肝試しやろうぜ！」

いつも一緒に遊んでいる悪友、山本ことやマサンが突然言い出してきた。

俺を含め4人が扇風機の前にまるで軍隊のように横一列に並んでいたが、その一言でみんな一斉に右向け右をした。

「なんでこの年にもなって肝試し？もうハタチ一歩手前なんだけど」

仲間の一人が言い出すとみんなつられるように賛同した。

「大体するにしてもやる場所がないじゃん。

墓場なんて行っても全然怖くないだろ。」

扇風機を強風に変えながら俺が若干イラつきながら言った。

なにせ今は夏真っ盛りだ。

夜でも十分暑いしそれにこのメンツで墓場なんか行っても歩きながらエロ話しておしまいだ。

そんなむき苦しいイベント俺は絶対行きたくない。でも心霊スポットみたいな本当に出そうな場所ならべつだけど…

などと思っていたら他のメンツも同じようなことを口々に言い出した。

だからといってこの近くに心霊スポットなんて…と思っていたら

「場所ならあるじゃん。あのボロ神社なら問題ないだろ。」

ヤマサンがどや顔でこちらをみてきた。暑いのにイライラで汗が増した気がする。

ヤマサンが言い出したボロ神社とは町のはずれにひっそりある神社のことだ。

その神社の周辺はよく神隠しが起きたとされて、小さい頃はよく親にあの場所には近づくなと何度も言われてきた。

時がたち、大きくなっても特に行く用事も気持ちもなかったのでヤマサンに言われるまで忘れていた。

「あの神社か…いいね！おもしろそうじゃん。」

友人1人が盛り上がりだしたのを始まりにみんなさっきと打って変わってテンションが上がっていた。

「よし、じゃあ決定な。出海も行くだろ？」

もう行くのは決定事項らしく残るは俺の意見だけになっていた。

「しょうがねえな俺がいないと始まらないもんな。」

俺はクールに決めようとしたが汗と扇風機の風で髪がえらいことになり、まったく決まらなかった。

「そういえば、あのボロ神社の名前なんだっけ？」

友人の1人が俺のさっき出来事を無視して言い出した。

「えっとね、前にばーちゃんに教えてもらったんだけど…」

ヤマサンがシャツをまくり上げて額の汗を拭いて…一言

「たしか…博麗神社。」

俺は待ち合わせ時間きっちりの午前0時に到着したが、みんなは待ち合わせ場所に既に集まっていた。

30分前にはみんないたらしい。

どんだけ楽しみなんだよ…まあ俺もだけど。

「おせーよ。なにしてんだよ！そんなだから彼女できないんだよ！」

「遅刻してないのに、なんでそこまで言われなくちゃいけないんだよ。」

俺は若干涙目になりながら無事みんなと合流し、さっそく博麗神社へと向かって歩き始めてた。

少年移動中……

「だから貞子ちゃんはマジで美人だから」

「やっぱり黒髪ロングは最高だな。」

などと相変わらずのバカ話をしながら歩いていると目の前に神社の階段らしきものが見えてきた。

「これか…」

「なんかすげえ不気味だな。」

「だからいいんだろ！はやく階段上ろうぜ。」

みんな期待と不安を持ちながら石段を上っていった。

第一話「肝試し」(後書き)

もうちょつとで幻想入りだ！
次はもっと長めに書きたい。

第二話「幻想入り前編」(前書き)

アドバースや感想あったらおねがいます。

第二話「幻想入り前編」

カッ、カッ、カッ

軽い音がいくつも石段に響いていた。

カッ、カッ、カッ

懐中電灯で前を照らしながらゆっくりと上っていく。

「……」

「……」

先ほどまで騒いでいた5人はまるで親から怒られた子供のように押し黙っている。

聞こえるのは虫の声だけだ。

みんなわかっているのだ。ここが明らかに他と違うことが：

「なあやっぱりやめねえ？」

「そうだよ！ここなんかヤバイよ！」

俺が耐えきれず言い出したら、一番臆病な友人もそれに賛同してきた。

「なにいつてんだよ！せっかくここまで来たんだから見えていこうぜ！」

「こんだけ人数がいれば余裕だろ」

「そんなに怖いなら手つないであげようかww？」

などと他のメンバーはそんなのお構いなしに上っていく。
手をさしだしてきた友人には軽く肩パンをしておいた。

「お！」

俺が懐中電灯で石段の最上段を照らした。

「やっと着いた」

「すげえ…やっぱりなんかでそうだな…。」

「ここに納涼肝試し大会の開催を宣言します！」

みんな着いたとたんにテンションが上がりまくっていた。

「よしじゃあ肝試し開始！」

『オー!!』

俺もさっきまでの感覚など忘れてハシヤギ始めた。

境内はひどく閑散としており、社らしきものがぼつんとあるだけだった。

社は木造らしく、柱が手入れされていないため今にも崩れるんじゃないかと思わせる程で、障子紙もまったく役目を果たしていない程にボロボロだった。

「中入ってみようぜ！中！」

ヤマサンが社を指差し、社に向かって歩き始め俺達もそれに続いた。

俺は懐中電灯で目的地である社を照らしていたら、その時俺はある違和感に気づいた。

（あれ？なんで中が明るくならないんだ？）

懐中電灯で中を照らしているはずなのに社の外側ばかり明るくなって、穴だらけの障子の向こうは暗闇のままなのだ。

そんなことを考えていたら社の目の前までできていた。

「なんで中見えないかな…おかしくね？」

「社の中が汚れて真っ黒だからだからじゃん？」

俺が違和感を指摘したがまったく相手にされず、みんなで外から覗こうとしたがやっぱり暗闇しか見えない。

「出海はチキンだなあww中に入ればわかることじゃん！」

ヤマサンが障子に手をかけ、開けようとした瞬間。

俺に今までにない程の悪寒が襲った。

（ヤバイ…なんだこれ…）

俺は生まれて初めて金縛りになってしまい、指一本も動かせない。
目は動かせたので辺りを見たらみんなも同じように汗を滝のように
流しながら固まっていた。

その悪寒は間違いなく…俺達に対する殺意だった…。

まるで針を刺されいるようなものすごい殺気でそれは明らかに俺達
の後ろから向けられていた。

（後ろに…誰がいる…。）

汗がまったく止まらず、何キロも走ったように息も上がって呼吸す
るのが苦しい。

カッ、カッ、カッ

石畳の上を歩く音。しかも段々と音が…

(こっちに近づいてきてる…)

カッ、カッ、トンッ

足音が止まった。

俺達の真後ろで…

「あ、にう：げえ」

俺は声にならないうめき声を出したのと同時に、

「あなた達こんな夜遅くにこんなところで何をしてるの？」

澄んだ綺麗な声がしたと思ったら、あの殺気はまるで煙のように消えていた。

(助かった…?)

いまだに心臓はバクバクで汗は脱水症状になるんじゃないかと思う程かいていた。体はなんとか動かせるようになり恐る恐る後ろを振り返ると…

そこには今までの人生で見てきた女性の中で間違いなくベスト3には確実に入るほどの美女がいた。

とても整った端正な顔立ち、柔らかそうな金砂の髪、今にもおとぎ話の舞踏会に行けそうな紫色のドレス。

とにかく俺の表現力では伝えきれない位その人は綺麗だった。

他のみんなも状況が掴めていなそうだったが鼻の下はきちんと全員伸びていた。

さすがは我が友たちよ…

少年説明中…

「まあ、皆様は肝試しでここを訪れたのですか」

「そうなんツスよ！結局なにもなかったツスけど、でも紫さんみたいな美人に会えて最高ツス」

「紫もこんな遅くに仕事なんて大変ですね。」

ヤマサンが興奮しまくっていてすごい暑苦しかった。

紫さんは仕事でさまざまな神社を周り、調査しているそうだ。俺達の町には夜遅くに着いて、さっそく歩いていたらここを見つけたらしい。

少年、美女談笑中……

30分ほど紫さんと俺達は話し、紫さんにもう遅いから帰ったほうがいいと言われたのでみんな渋々帰ることになった。

紫さんも帰った方がいいと俺達は言ったがまだ調べ物があるらしく一人残るらしい。

『紫さんがんばってください！さようならーッス』

みんなで鳥居の前で別れの挨拶をして石段を下っていった。紫さんは俺達が石段を下り見えなくなるまで終始手を振ってくれていた。

「いやゝ紫さん綺麗だったなゝあれ絶対俺に手振ってたぜ！」

「バーカ、俺に決まってるだろ」

「でも俺はあと10歳若いほうが…」

『ロリはしゃべるな!!』

みんな最初の目的をキレイに忘れて舞い上がっていた。
その時俺は真剣に焦っていた。

「んゝ出海どした？」

「あゝ携帯、神社に置いてきたっぽい。ちょっと行ってくる。」

もう一度石段を上ると、「紫さんに手だすなよ」と笑い声が聞こえてきたので、俺からもヤジを飛ばして石段を二段飛ばしで上がっていった。

第二話「幻想入り前編」(後書き)

次、次こそは…幻想入りを…

第三話「幻想入り後編」(前書き)

感想やアドバイスあったらおねがいます。

第三話「幻想入り後編」

俺こと鶴岡出海つるおかいずみは今なかなかの試練を迎えていた。

携帯を忘れて取りに行くまではいいが、友達に啖呵を切ってしまい今孤独と戦いながら石段を上っている。

「俺ってば：ほんとに：バカ！」

仕方ないのでウォークマンで熱いアニソンを聞きいて気を紛らわしながら、来たときの2倍の速度で石段を上っていく。

「やっと：着い：た：」

荒息になりながら到着し、さっきまでみんなでいた神社はまるで別物のように静まり返っていた。

「あれ？紫さんどこいんのかな？」

（せっかく怖い思いをしてまたこんな場所にきたんだから、もう一回位目の保養をしても罰は当たらねえだろう。）

自分の失態を棚に上げ、携帯を探す前に美人を探すという哀しい男の習性がでてしまっていた。

などということを考えながらあたりを懐中電灯で照らしていると、社の前にさきほど見たばかりの美女の後ろ姿がぼんやり照らされていた。

「あ、いた！紫さん〜！！」

俺は寂しさを紛らわすために大声で呼ぶと紫さんはこちらを振り返った。

紫さんはさっき会った時と変わらず綺麗だった。
ただ隣にカーテンのようなものに無数の目があった事を除けば…

（え、なにアレ？紫さんの隣の…え？なにアレ、）

あまりの出来事に言葉が出ず思考も同じことを何度も繰り返しパニックになっていた。

「あら、さっきの…帰ったんじゃないの？」

「い、いや…携帯…落としたみ、みたいでで…」

紫さんがクスクスと笑みを浮かべながらこちらに一步近づき、俺はまったく舌がまわらず震えながら一步後退する。

（とにかく逃げないと、携帯なんてどうでもいい!!）

携帯を犠牲にすることを決心して、一目散に石段まで走ると後ろを振り返った、瞬間。

「あなたが落としたのってこれのこと？じゃあはい。」

俺が振り返った目の前に紫さんの隣にあったはずの目玉つきカーテンが出現し、その中から細く白い手が伸びてその手には俺の携帯を握っていた。

「なんだよこれ…マジック？冗談きついッスよ紫さん!？」

「手品なんかじゃないわよ。これは私の能力なの。」

紫さんは電波な発言をしながら、白い手は携帯のストラップをつま

みプラプラさせている。

「早く受け取ってよ！腕が疲れちゃうわ」

「そんな手品でいたいけな大学生虐めて楽しいッスか？」

俺はまだパニックっていたが、だんだんと先程までの恐怖が理不尽なイタズラに対する怒りに変わっていった。

ブンッ

俺は悪趣味なカーテンからでている手から乱暴に携帯を取った。

「ッ！！やっぱり…」

その時紫さんが一瞬驚いた顔をしたがすぐにまた掴みどころのない笑顔に戻っていた。

「ねえあなたお名前は…出海君だったかしら？」

「そうッスけど…」俺はイラつきながら答えた。

「あなたこれが手品だと思うの？」

「当たり前じゃないですか！他に何があるんツスカ！」

「ふうんじゃあこれも手品かなあ？」

そういうと紫さんに悪趣味な目玉つきカーテンが頭から覆い被さったかと思うと…

「ッ！！」

「ねえ？これも手品かしら？」

俺の目の前に紫さんの整った顔が目玉つきカーテンから出現し、下半身は先程いた場所に残っている。

「…あんた一体…」

「改めて挨拶するわ。私は八雲紫、妖怪の賢者にして幻想郷の管理者よ。」

「妖怪？幻想郷？何言ってるんだこいつ？」

俺は落ち着きかけていた頭がまたパニックになっていた。
普通ならこんなこと言われてもマンガやアニメの見すぎと言って流

すかからかうかのどちらかだが、目の前で起きていることは間違いない現実だった。

「その妖怪の賢者さんがこんな俺になんの用事ですか？」

俺が疑い混じりに質問した。

「もうまだ疑ってるわね！ まあいいわ：単刀直入に言うわよ。あなた他の世界に興味ない？」

「はあ何言って…」

「答えは聞いてないわ！ あの時皆殺しにしなかったただけありがたく思いなさい。」

（皆殺し？…ッ！！まさか…）

俺は直感的に思い出した。

あの時の恐ろしい殺気を…

「あの時の…あんたが？」

「そうよ。あんだけここで騒がれたらさすがの私も怒るわよ。」

俺はこれで確信した。

コイツは人間じゃない：人間があんな殺気出せるわけない。そしてなにより怖かったのは騒いだけで人間を殺そうとする思考だった。

「なんで俺が他の世界に行くことになるんだよ！」

「んゝ暇つぶし？あのメンバー中であなたが一番おもしろくなりそうだし、ちなみに携帯盗ったの私よ。」

「ふざけんな！！」

（もゝ付き合ってられん。どんなに美人でもどんなに美人でも）

俺はダッシュして逃げ切ろうとしたら足元に先程の目玉つきカーテンが広がっていた。

「ありゅえ？」

俺は生涯発したことのないような声を出していた。

「一名様幻想郷にご案内よゝ到着先はランダムなのでご注意くださいーい。」

「うざけん、なああああああ！！」

俺はまるでドツキリの落とし穴にハマった芸人のように落ちていた。

「おねがいね…出海君…」

こうして俺の日常は崩壊した。

第三話「幻想入り後編」(後書き)

やっと幻想入り！

次から幻想郷編始まるよ！

第四話「遭難」(前書き)

長く書きたいけどなかなか時間がとれない…

感想やアドバイスあったらおねがいします。

第四話「遭難」

ドスッ！！

大きな音が真夜中の森に響き渡る。

「チクシヨー！！ぜってー許さねーあのバツ……」

その言葉を言ってしまったら自分の人生が終了してしまう気がして止めた。

「つーかここが幻想郷なのか？」

辺りを見わたすと木、木、木つまりは森の中だ。

だた少し湿度が強くジメジメしていてキノコがあちらこちらに生えている。

（とりあえず歩くしかないよな……民家なんてあるのか？）

俺は不安を感じながら、懐中電灯のスイッチを入れて歩き出した。

少年探索中……

（なんかムリじゃね？）

時計を見てみると2時間近くさまよったが民家どころか人っ子一人もいない。

「あゝムシムシするし、だるい！」

俺は苛立ちで大声を出してその場に座りこんだ途端に寂しさやいろいろな感情がこみ上げてきた。

「帰りてえよ……」

そう思うと抑えきれなくなり、目頭が熱くなってきた。

（イカンこんな時こそ明るくポジティブに考えなければ！

たとえば…幻想郷の人？達はきっと美人が多いかもしれない！）

ガサガサッ

（動物？いやもしかしたら俺を迎えにくれた美少女か？そうだが、そうに違いない！）

俺は不安と寂しさが限界点を超えてしまい、ついに超えてはいけな
い一線を越えさせた。

「んゝおいおい可愛い子ちゃん何を隠れているんだい！俺はここだ
よゝ」

ガサガサッ

「もゝ恥ずかしがってゝ早くでておいでよゝ」

ガサガサ…バツ

「そうそう、いい子だ…ね？」

飛び出してきたのは美少女では勿論なく…3つの目を持った狼だった

その瞬間に俺は現実に叩き戻された。

（まじかよ…美少女との運命的な出逢いどころか死亡フラグビンビ
ン何ですけど！）

3つ目の狼はグルグルと唸りながら俺との距離を詰めてきている。とても走っても逃げ切れそうにない。

(相手狼っばいし…)

俺との距離があと5メートルになった時に…狼の化け物が俺に飛びかかってきた。

「ふんっ！」

俺は懷中電灯の光を狼の化け物の目に向けた。

「キャウン！」

「よっしゃあ！あばよーワン公WW」

光で一瞬怯みその隙に俺は全速力で逃げようとした。

(よし！このまま…いける！)

「え…」

「ガルルルウウウ」

走り出そうとすると前に仲間と思われる、別の狼の化け物が現れた。最初の一匹もすでに回復し、こちらにジリジリと詰め寄ってきた。

「グルルル」

「ガルルル」

（あゝもうこりや死んだわ。どうしよもねえ…）

頭は何故かスッキリして、これから起きるであろう出来事をスナリ受け入れようとしていた。

（まだ今週のジャン○読んでねえのになゝあと他にも…）

「グルルルウウウガウ!!」

一匹が俺に飛びかかろうとした瞬間、

ドゴン!!

轟音と共に俺を襲おうとした方の一匹が10メートル程吹っ飛んだ。

「ッ!？」

「まったく…うるさくて集中できないじゃないの!!」

土煙をたてながら出て来たのは…

「まじかよ…」

まるで人形のように美しい美少女だった。

第四話「遭難」(後書き)

主人公にどん引き…

第五話「人形の館」(前書き)

やつとアリス登場です。

第五話「人形の館」

「嘘から出た真」ということわざがある。

俺はいまそれをただ今、現在進行形で直面していた。

（ほ、ほんとにきたああああ！！美少女！？）

吹っ飛んだ方はフラフラしながら逃げようとし、もう一匹も唸りながら後退りを始めた。

「去りなさい。次はさつきよりキツイの当てるわよ。」

その少女がそういうと後ろから何かがヒョコッと顔を出した。

（なんだあれ？人形？）

「行きなさい。上海。」

少女の肩にいた人形はまるで言葉を理解したように少女の前に対峙した。

それより俺が驚いたのは…

「に、に、人形が浮いてるううう!!」

「グルルルウウウ…」

もう一匹の狼の化け物もついに少女に睨み悔しそうに逃げ出した。

「た、助かった」

「まったく騒がしくて作業が全然進まないわ。」

少女がこちらをじっと凝視してきた。

「あなた外来人ね。泊まるとこないんでしょう？ついてきなさい。」

少女はスタスタと歩き出した。

「ちょっと外来人ってなに？あとさっきどうやってあの化け物吹っ飛ばしたの？あと名前は？あと…」

俺が質問するたびに少女の顔が引きつってきた。

「あゝうるさいなゝあっち着いたら教えてあげるわよ。」

（あっちってどこだよ…）

などと思いながら歩いていると、目の前にぽつんと森の中に明かりが見えた。

玄関まで到着すると俺は玄関の前で立ち止まった。

「さあ着いたわよ。とりあえず入って。詳しい話を聞きたいんですよ。」

「いや…もしかしてこの家って君一人暮らし？」

「そうだけど…なに？」

（神は俺を捨てていなかった！

こんな美少女と一つ屋根の下なんて…ビバ幻想郷！！）

「お邪魔しますゝ！！」

俺は心臓の動機を手で抑えながら少女の家に入った。

家の中は人形だらけだった…

「な、なんじゃこりゃあ!!」

「みんなただいま。お茶入れるから適当に座って。」

女子は俺の驚きを無視してお茶を入れ始めた。

俺はソファアの上に座り何気なく携帯を開いた。

(やっぱり圏外…)

ため息をしながらうなだれていると人形がお茶を運んできた。

「ありがとう人形ちゃん…」

「あら？驚かないのね珍しい。大抵の外来人は大声を上げていたのに。」

「そりゃあ、こんないろいろありゃあ慣れるわ。」

「あらそう？じゃあまずは自己紹介から私はアリス・マーガトロイドよ。アリスでいいわ。ちなみに魔法使いよ。」

「俺は鶴岡出海よろしくな。」

俺は改めてアリスを見るとやはり美少女だった。

さっきは暗くてよく見えなかったが大きな青い瞳、短いながら綺麗な金髪、どれをとっても一級品だ。

あながちさっきの自分の考えは間違いじゃないかもしれない。

魔法使いという点はスルーしたいがあちらこちら浮かんでいる人形を見ていると認めざるを得なかった。

「さて…自己紹介も終わったし、なにから話そうかしら…」

「まずここは幻想郷なのか？外来人ってなんだよ！あとr y」

「あーわかったわかった最初から話すわよ。」

女子説明中……

「これで大まかな説明は終わり。だいたいわかった？」

「はーやっぱり幻想郷かー。」

そんな妖怪だの魔法使いだの妖精だの相手にしてちゃ命がいくつあっても足りねえ、なんとかなんないかなー」

先ほどの出来事でさっそくトラウマができてしまい、なにか自分の身を守るようなものがあればと思っているのだが…

（そんなのあるわけねえよな…）

そう思っているとアリスが口を開いた。

「じゃあ明日香霖堂に行ってみる？」

「なにそれ？なに屋さん？」

「幻想郷は外の世界で忘れられたものが入ってくるって言ったでしょう。それを集めて売っている変わり者の店よ。もしかしてなんかあるかもしれないわ。」

「まじでか！？よし明日行こーぜ！絶対な！」

俺は興奮し、アリスに詰め寄った。

「え、ええわかったわ。それじゃあ明日に備えて早く寝なさいもう遅いわよ。」

（きた、ついに来てしまった…この時が）

美少女と一緒に屋根の下で寝るなど俺には刺激が強すぎて寝れるわけない。となると夜更かししてアリスの寝顔を拝めるチャンスだ。

「それじゃあ私ちょっと出かけてくるから何処にでも好きに寝ていいわよ。」

「え…」

ボタンとドアの音が虚しく響いた。

（まあいいさあ…アリスがいつも寝ているベッドにダイブさせてもらおうじゃないカ）

ダイブの前の準備体操を終えて飛び込もうしたらなにやら視線を感じた。

ジー

アリスと一緒にいたかわいらしい人形がこちらを凝視していた。

「えー確か上海ちゃんだっけ？ちよつと見られると恥ずかしいな」

ジー

（こっ、こんな純粋な目にそんなやましい行為は見せられん…）

「ごめんね上海ちゃん俺は大人しくソファで寝るよ。」

「？」

俺は上海の頭を撫でてソファにトボトボと向かっていった。
上海はまったくわかっていなそうだったが…

トーン、トーン

外からなにやら音がしてきた。

(なんだろう?…もしかしてアリスが妖怪に襲われてるのか?)

「上海ちゃんちょっと出かけてくるわ。」

そう思うと急に不安になり、外に飛び出していた。

(アリス…頼む無事でいてくれ…)

トーン、トーン

音がだんだん大きくなった。

アリスも魔法使いといっても女の子だ。もしかしたら敵に囲まれて泣いているかもしれない。

ついに音がする目の前まで到着した。

「アリスだいじ、」

「あゝあの引きこもりがあゝ私の魔理沙にちよっかい出して、許さない紫もやしがあゝ魔理沙は私のものなんだから。」

アリスが…誰かを罵倒しながらわら人形に釘を打ちつけていた。

俺はその光景を見ながら、さっき自分が考えていたことを走馬灯のように思い出していた。

「…帰って寝よ…」

こうして幻想郷初の夜は更けていった。

第五話「人形の館」 (後書き)

アリスが壊れてしまった…だがそれがいい！

感想やアドバイスあったらおねがいします。

第六話「香霖堂」(前書き)

感想があつたらおねがいます。

第六話「香霖堂」

「おはよー出海！ぐっすり寝れた？」

「あ、ああ…ぐっすりな…」

「ぐっすりのわりには疲れてそうだけど…私はこんなに気分爽快なのねえ。」

（そりゃあんなことやればなあ…）

俺は昨夜、アリスのアノ光景を目撃したせいで一睡もできなく、今になってうつらうつらしてきていた。

「さあ香霖堂へ出発するわよ！上海、そいつ連れてきて。」

アリスが満面な笑みをみせながら上海に命じ、上海が俺を一生懸命に引っ張りながらアリスのもとまで連れて行こうとする。

「ありがとう上海ちゃん…上海ちゃんはエライね…」

「？」

こんなかわいい人形があんなヤンデレから造られたなんて、考える
と少し泣きそうになってしまった。

少年、少女移動中……

「着いたわよ。ここが、」

「香霖堂？」

確かに看板には香霖堂と書いてあり、店先には一昔前のポストやら
バス停など様々な物が並んでいた。

「霖之助さんいる」

アリスは店主らしい人の名前を呼び、俺は店内を周り商品を物色し
ていた。

「はいはい、アリスかいらっしゃい。」

店の奥から出てきたのは銀髪でメガネを掛けていて涼しい顔をした
男の人だった。

「今日はなにをお探しかな？ そちらは：初めて見る顔だね外来人かい？」

「そうなのよ、ほら！ 自己紹介しなさい。」

アリスが俺を店主の前に強引に引っ張りつてきた。
あんたは俺のお母さんか：

「ども、鶴岡出海です。外の世界から来ました。」

「僕は森近霖之助、香霖堂の店主をやっている。出海君は外世界から来たんだよね？ なにか外の世界の道具は持っていないかな？」

森近さんは目を輝かせてこちらを見ながら言った。

「たいしたのないと思うッスけど…」

俺はポケットの中や肝試しの時に持ってきていたリュックの中をあさりはじめた。

持っていたのは携帯、ウォークマン、懐中電灯、財布、心靈写真を

撮るためのデジカメ、など大した物は持っていなかった。

「ちょ、ちょっとそれ見せてくれないかい？」

「いいッスけど…ただのデジカメですよ。」

森近さんは興味深々に俺の持ち物を見てもっとも興味を持ったのはデジカメだった。

「んーなるほど、天狗のカメラとは違うようだな。」

（天狗もいるのか幻想郷は…それにカメラ持ってるって…）

なんか妖怪とかいってもあんまり人間と変わらないようで親近感が湧いた。

「霖之助さん今日来たのはね2つ目的があるの。1つは出海が武器になる物がないと心もとないらしいから探しに、2つ目は…」

アリスがデジカメの使い方を俺に質問しながら操作している森近さんにアリスが言った。

「あんた魔理沙に手だしてないわよね？」

「だす訳ないだろ！いつもあっちが勝手に押しかけ来るだけだよ。」

「そう…魔理沙になんかしたらどうなるかわかってるわね？」

（ん？魔理沙？確かどこかで聞いたよな…）

聞いたことがあるがいつ聞いたのか思い出せない、思い出しちゃいけない気がする。

「さ、さあ出海君！武器になる物を探してるのだろ？店内にいろいろあるからみていってくれ。」

「ありがとう森近さん。」

そういわれ、店内をじっくり見ながらまわっていると：

「よー景気はどうだ？香霖！」

俺達以外の元気いっぱいな大きな声がした。

「魔、魔理沙！？」

「今はお客がいるんだ。あんまり散らかさないでくれよ。」

「アリスもいたのか。まったく私がいつ散らしたか教えてほしいぜ！」

「3日前と今、現在進行形でだ。」

アリスの興奮した声と森近さんの呆れた声がしたので少し覗きにいくと、金髪でおとぎ話に出て来る魔女の格好をした小柄な少女がいた。

「お、なんだ見ない顔だな？こっちこいよー。」

「…出海」

魔女の格好をした少女がこちらに気づき手をブンブン振っている。その時アリスの顔がものすごい怖くなったがスルーすることにした。

「俺は鶴岡出海、外人だよろしく。」

俺が挨拶すると彼女は気さくに返してくれた。

「私は霧雨魔理沙、普通の魔法使いだ。魔理沙でいいぜ！よろしくな。」

第六話「香霖堂」(後書き)

ついに魔理沙登場です。

次回はやっともう一人のオリキャラ登場です。

第七話「その名は秋水」(前書き)

感想もらうとやる気めっちゃ上がります。

これからも感想お待ちしますのでよろしくおねがいします。

第七話「その名は秋水」

「そりゃあ災難だったな、出海！」

「笑い事じゃあねえよ！ここまで何回死にそうになったことか…」

俺は魔理沙にこれまでの出来事を話していた。

魔理沙はとても話しやすくもうすでに友達感覚でしゃべれるようになった。

そういえばあいつら今頃なにしてるかな？

俺のこと心配してるのだから？

「出海はアリスの家に一晩泊まったんだよな？よかったじゃないかアリス！そのまま出海とくつついたらどうだ？」

「だ、誰がこんなオス猿と付き合うのよ！私は…心に決めた人がいるのよ！」

「そりゃあ初耳だ！いつかお会いしたいものだぜ！なあ香霖？」

「僕に振らないでくれよ。あとが怖いんだから…」

「オス猿って…」

魔理沙の登場で場はものすごく明るくなったが俺の心には深いキズがついた。

「そういえば出海君、なにかいいものは見つかったかい？」

魔理沙の登場ですっかり忘れていたが、俺はここに武器を探しに来たのである。話し込んですっかり本来の目的を忘れていた。

「いやー通り見たんですけど…なかなか…」

店の中を一通り見ても武器に使えるようなものはなく、一昔前のガラクタとしか思えない道具しかなかった。

（やっぱりそんな都合よく見つからないよなあ…）

「おい出海！これなんかどうだ！？」

諦めかけていると魔理沙の声が店内に響き渡った。

「あ！魔理沙それ奥から持ってきたね。そっちは売り物じゃないっ

て何度も言ってるだろ。」

魔理沙が持って来たのは刀だった、黒の鞘に面白みもない拵え。しかし普通の刀と違うのは鞘の部分に御札が貼られ鍔の部分に鎖で抜けないように固定されていた。

「なんか…ヤバそうね…」

「魔理沙これはヤバいんじゃない？」

「そうか？マジックアイテムみたいじゃないか。なんかすごい力感じるぜ！」

アリスも俺もあまりの刀の異様さに言葉がでなかった。

「魔理沙それは売り物じゃない、早く戻してくるんだ。」

「なあ香霖この刀なんなんだ？」

「まったく：そうなら聞かないからな君は…」

森近さんはため息をつきながら語りだした。

「この刀はかつての幻想郷最強の剣豪が持っていた…。そしてその刀には確かにすごい力が宿っている。」

「やっぱり!!」

魔理沙は興奮しながら聞いていた。

「その力の正体は…今までこの刀が切ってきた妖怪千匹分の妖力と能力者百人分の魔力といわれている。」

『ッ!!』

みんな森近さんの言葉で一気にその場の空気が凍りついた。

「マジかよ…そんなにヤバいのが…」

「魔理沙早く下の場所に返していっちゃい!」

アリスと魔理沙もさっきまでとは打って変わって真剣な表情で刀を元の場所に返そうとした。

「待ってくれ！」

『!?!』

俺は二人を呼び止めた。

「その刀少し見せてくれ。」

「何言っただよ出海！」

「いいから、見せてくれ！」

魔理沙は俺に気圧されて渋々と刀を渡した。

「俺はこの刀からそんなに嫌な感じはしないんだよ。」

「何言ってるの！早く渡しなさい！」

「イヤだー…」

アリスが強引に俺から刀を奪おうとして引っ張り合いになってしまった。

「グギギイイ…渡しなさい！…」

「イヤアア…ダアア…！」

お互いに一步も引かずに俺が柄をアリスが鞘を引っ張っていた。

バキッ！！

大きな音がするとアリスと俺はお互いに尻餅をついてしまった。

「お、おいお前ら…」

「君たち…なんてことを…」

『はあ？』

俺とアリスは状況を掴み切れていなかったが目の前を見た瞬間にすぐに理解した。

鎖が外れて刀身が鞘から若干でてしまっていた。

「み、みんな逃げろー」

魔理沙が大声を出して叫んだ瞬間にみんなで外に走り出した。

俺以外は…

俺はあまりの出来事に断つことができなくなってしまっていた。

「おい出海なにやってるんだ！早くこっち来い！」

魔理沙が俺を連れだそうと手をつかもうとしたした時。

「うるせえなく後百年くらいゆっくり寝させてくれよ。」

ここにいる誰の声でもない声が聞こえたかと思うと先ほどまで刀だった場所に男が眠そうに欠伸をして座っていた。

「あ、あんた誰？」

俺が恐る恐る聞いてみた。

「俺か？俺の名は秋水、付喪神だ。よろしくな！にいちちゃん」

これが俺と秋水の初めての出会いだった。

第七話「その名は秋水」(後書き)

やっともう一人の主人公だせた！

香霖堂の次はどこにしようかな

第八話「そして旅立ちへ」(前書き)

なかなか暑くはかどらんテストも近いし…

第八話「そして旅立ちへ」

付喪神とは長年使い古された道具に神霊や魂が宿ったものの総称である。

「付喪神なにそれ？」

そんなこと当然俺が知るわけもなく…

「知らないのかよ…ところで兄ちゃんかい？これ壊したの？」

秋水と名乗る男が千切れしまった鎖を指差した。

「いえコイツがやりました。」

俺は速攻でアリスを指差した。

「ちょ、出海！私のせいにしないでよ！」

「最初にアリスが引っ張るからだろ」

「アンタが勝手にとるからでしょ!!」

「アハハハ!! お前ら面白いな。」

そんな光景を見ていた秋水がたまらず吹き出していた。

「なかなかお似合いのカップルじゃないか!!」

「ッ!!」

魔理沙が俺達を見て茶化すつもりで言ったのだろうが、アリスは本気で受け取ったみたいだった。

「冗談じゃないわ! 私がこんな短足猿となんて…しかも魔理沙に言われた…死のう。」

「どうしたアリス? 香霖、アリスどうしたんだ?」

「僕に振るな…」

「短足猿って…さっきより悪化してるんですけど！」

「アハハハ！やっぱりお前等面白いな！」

鎖の事は気にするなよ、アレ封印でもなんでもないから。」

『はあ？じゃあアレは？』

俺達4人の声が綺麗にハモって聞いた。

「あの鎖は刀の下緒と同じだ。俺自身の刀身がでないように縛ってたんだよ。そもそも俺に封印とか結界とか効かないし！」

なんで効かないのかと聞こうとしたが、それよりも重要なことがあったのでそちらを優先することにした。

「なあ秋水さん。俺と一緒にあっちに帰る方法が見つかるまで旅しないか？」

対妖怪用の武器を手に入れるようにしていたなかの秋水さんの登場は俺にとっては運命としか思えなかった。

「…おい、にいちちゃん。さっきの眼鏡のにいちちゃんが言ってた事は本当だぜ。」

俺は沢山の妖怪や人間を切ってきた：それこそ死体で山ができる位にな。その話を聞いてもまだ俺が必要かい？」

秋水さんはどこか悲しそうな顔をして俺に問いかけてきた。

俺は：

「アハハハ！馬鹿だな、アリスと同じ位馬鹿だぜ！」

「な！？」

「出海：コロス」

秋水さんはあまりの事に驚いていた。

アリスはどこから持ってきたか荒縄を俺にかけようとしてくる。

スンマセンシタ：アリスさん：絞めるのは勘弁してください

「：どう言うことだよにいちちゃん：」

秋水さんはまだ俺が言ったことを把握していないようだった。

「だから俺はそんな事関係ねえんだよ。当事者でもあるまいし：俺

は今の秋水さんを見て決めたんだ！」

俺は真剣な顔をして秋水さんの顔を見て言った。

「プッ、ワハハハ！！にいちちゃんのがよっぱど馬鹿だぜ！にいちやん名前は？」

「：鶴岡^{つるおかいずみ}出海だ！」「改めて秋水^{しゅうすい}だ！

さんはいらねえよ。これからよろしく頼むぜ出海！今日からアンタが俺の使い手だ！」

こうして俺は秋水の使い手になった。
スッと秋水が握手を求めてきた。

「よろしくな秋水」

「ッ！！…やっぱり面白いな出海は。」

「？」

俺はこの時秋水が言っている意味がまだ分かってなかった。

「さてじゃあ俺等はそろそろ行くわ。
森近さんいいのこれ全部タダで？」

「いいよ、これは僕からの餞別だ。いろいろ外の世界の話も教えて貰ったしね。」

森近さんは俺に日用品と着替えを餞別としてくれた。

「じゃあ私もちよっくら紅魔館に行ってくるぜ！」

「私も行くわ！アイツに抜け駆けはさせないんだから！」

俺達4人は香霖堂を後にした。

「じゃあお別れだな！なんかあったら駆けつけるぜ！たぶんな」

「まあ死なないように頑張りなさいよ」

「ちよ、ちよっと待ってくれ！」

アリスと魔理沙が飛びだした時俺は呼び止めた。

「どうしたんだぜ？」

魔理沙が箒にまたがりながら降下して俺達の前まできた。

「まず人里に行こうと思うんだがどう行けばいいんだ？」

「ああそれならこの道を真っ直ぐ行ったところにある湖をそっ
けば近道だぜ！！」

「わかったサンキュー
またな魔理沙、アリス」

俺は遠くなる2人にずっと手を振っていた。

「よし秋水、人里へ出発だ！」

「じゃああとは頼んだわ…」

「はあ？」

そういうと秋水は刀の形に戻ってしまった。

「着いたら教えて…俺寝るから…」

「てめえふざけんなああああ！」

ミンミンミンミン

蝉の声と俺の声がいつまでもこだましていた。

第八話「そして旅立ちへ」(後書き)

やっと旅立ちだ！

感想お待ちしてます。

第九話「リボンを探して…」（前書き）

もっと東方のキャラドンドンだしていききたいです。

第九話「リボンを探して…」

ミーンミーンミーン

蝉時雨が狂ったように鳴り響く。

「ほら、さっさと歩かないと日が暮れちまうぞ。」

「…あちい、眠い…」

俺が5メートル先を歩き、その後ろをトボトボと秋水がついて来る。

「お前そんな格好してるから暑いんだよ！」

秋水の格好を改めて見ると黒のバンダナに黒のコートにシャツにズボン、真っ黒だ。
暑いワケである。

「暑いのは分かるけど眠って…いっぱい寝てたんじゃないのかよ。」

「んゝ150年位かな？」

「さっさと歩け!!」

大声を出したら、俺までさっきより汗が5割増で吹き出してきた。

少年、刀移動中……

「お!?!」

しばらく歩いて昼を少しばかり過ぎた頃、森の出口が見えて光が差し込んでいた。

「おおおお!! 湖だああああ!!」

森を抜けるとそこには霧がかかった湖が現れた。

「ふう少し休憩しようぜ。」

「しょうがねえなじやあ秋水はそこにいろよ! 俺ちよつくら周り見てくる。」

「あんまり遠くまで行くなよ。」

俺はやっと木以外の景色を見たせいで、テンションが上がり秋水をおいて周りの探検に行った。

「うわ！なんだアレ？」

しばらく歩くと反対側の岸に真っ赤な西洋風のお屋敷が見えた。

「趣味悪いなく館の主人はいったいどんな奴なんだろ？おっと！もうこんな時間か、そろそろ秋水のそこ戻らないと。」

他には特になにもなく、館も遠いので秋水のところに帰ることにした。

「おーい秋水ー。ただいま。」

「おう、おかえりーなんかあったかい？」

「んー悪趣味な館があっただけで特には…」

ガサガサ

「ッ！！」

森の茂みからガサガサと音がする。
俺は過去のトラウマが蘇っていた。

ガサガサ

しかしあの時とは違う。
こちらには秋水がいる。そのおかげであの時より少し気持ちが楽だった。

ガサッ

「あら？」

「ないよ…どこいっちゃたの…」

出てきたのは小さな背丈の緑色の髪をした少女だった。
ただ普通と違うのは背中に透明な羽根をはやしているところだろう。

「出海妖精見るの初めてか？」

「ティンカー・ベルだ…」

秋水の質問も聞かず俺はおとぎの世界の住人とあった感動にひたっていた。

「あ、」

妖精の少女がこちらに気づき向かってきた。

「あ、あのすいませんこれ位の黄色のリボンみませんでしたか？」

少女は手でリボンの大きさを表現し必死で俺達に伝えようとしてきた。

「見えないな…」

「俺も見えないな…」

「…そうですか…」

俺と秋水は見ていなかったことを告げると妖精の少女はうつむいて今にも泣きそうな顔になってしまっている。

「どうしたの？…ティンカーじゃなかった、妖精ちゃん？」俺は妖精に理由を尋ねた。

「はい：実は大切なリボンが風に飛ばされてしまって：私どうしていいか：」

「それなら俺達に任しとけ！絶対見つけ出してあげるよ。」

「ほ、ほんとうですか？」

「俺達！？」

「ちょっと待ってくれ！」

俺は秋水を引きずりながらリボンを探しに行った。

少年、刀探索中…

「ねえな…秋水も探せよ！」

「へいへい。」

しばらく探してみたが全く見つからない。すると秋水がポツリと呟いた。

「なあ…どうして妖精なんかマジで助けようとするんだ？別に出海関係ねえじゃねえか。」

「はあ？理由なんてひとつしかないだろ？あの子が可愛いからだよ！」

俺は自信満々に答えた。

「それだけ？」

「それだけ！」

「やっぱり面白いな出海は…ん？おいアレ！！」

秋水が指さした湖の水面には黄色のリボンが浮いていた。

「ちくしょう！遠くて届かない…」

岸から手を伸ばすがリボンは風に煽られてドンドン湖の中心を目指して移動している。

「しょうがねえな！ホラよ！」

「ナイスだ秋水！！」

秋水が刀に戻り、それでなんとかリボンを手に入れることができた。

「さあ妖精ちゃんに渡しにいくか。」

少年、刀帰還中…

「ホラよ！」

「ほんとうにありがとうございます。このリボン友達からもらった大切なリボンなんです。」

「そうなんだ、もう無くすなよ！え〜と…」

「あ、私大妖精って言います。友達からは大ちゃんって呼ばれてます。お二人は…」

「俺が出海で」

「俺が秋水だ！」

大ちゃんはさっきとは打って変わって、とても嬉しいような顔をしていた。

「じゃあ俺達行くわ。じゃあまたな〜」

「ちょっと待ってください！」

なんのお礼もなしに行かすワケにはいきません！」

大ちゃんは俺達の手を逃がさないようにがっちりと掴んで、まったく離す気はないようだった。

「いや悪いって！」

「いえ意地でもお礼しちゃいます。」

「じゃ、じゃあそう言われたら断れないな〜だろ出海？」

「そ、そうだな人里には別に急いでないし、断る理由はないよな。」

2人ともこんな可愛い子に誘われては断れないワケがない。

（しかし、お礼ってなににするんだろ？…さては大ちゃんってば俺達にあんなコトやこんなコトを…）

俺が思春期丸出しの妄想をしていると…

（アレ？大ちゃんに握ってもらってない腕が動かないんだけど…）

そう思いそっち側の手（右）を見てみると…
腕がカチコチに凍っていた。

「な、なんじゃこりゃああああ」

「その悪党達！大ちゃんから手を離しなさい！」

後ろを振り返ると青い見るからにバカそうな少女が俺達を指差していた。

第九話「リボンを探して…」（後書き）

さあ登場したキャラは誰でしょう？

第十話「秋水の能力」(前書き)

今回時間がなくて短いです。

感想お待ちしております。

第十話「秋水の能力」

「大ちゃんを離せ！！悪党達！」

「チルノちゃん！？」

大ちゃんが驚きながらおそらくあの妖精であろう少女の名前を呼んでいた。

しかし俺はそれどころではなかった。

「これやばいんじゃない？夏だからってコレはないんじゃない？なあ秋水これすげくね？」

「落ち着け出海！疑問形が多くて何言ってるかわからん！手は人里にいる医者に診せれば何とかなる。」

俺の頭はパニックっていたが人里に行けば何とかなるという秋水の言葉で少し落ち着きを取り戻した。

「だよな！なんとかな、」

「…たぶんな。最悪手を切り落とせばいいさ。」

「いやああああ！」

「大丈夫ですか出海さん？ヒドいよチルノちゃん！」

大ちゃんは俺を心配そうに懷抱しながら青い妖精に少し怒った口調で言った。

「大ちゃん：そいつ等にせんのうされたのね：お前らはこのサイキョーのチルノ様が絶対に許さないぞ！」

大ちゃんの言葉も届かずチルノと名乗る妖精は俺と秋水に敵意をむきだしにしていた。

「おいおい：なんかメチャクチャな事言ってるぜあの妖精。…ん？出海？」

「待てや：青キジもどきが：許さねえ妖精だろうが、女の子だろうが関係ねえ！少しお灸を据えてやるかかって来いやあああ！」

「正体を現したわね！悪者め！もう片方の手も凍らせてやる。」

「え？え？チルノちゃん、出海さん？」

お互いに火花を散らしあっているこの2人の争いは誰にも止められ

そうじゃない状態だった。

「秋水！！はやく刀に戻れ！」

「大丈夫か？片手だぞ？」

「いいハンデだ！」

それに俺には秘策がある。来いや青キジもどき！」

「弾幕ごっこのはじまりよ！くらえ！」

雪符「ダイヤモンドブリザード」

チルノが何かカードのような物を持って叫ぶと無数の氷の礫がこちらめがけて飛んで来る。

「ふん！おせーよ、ガキ！バドミントン部の反射神経はなめんなよ。」

俺は無数の氷の礫を目で追いながらカンペキにそれを受け流していた。

「なかなかやるわね！ならコレはどう？」

凍符「パーフェクトフリーズ」

「げ!？」

さっきのとは違いまったく規則性のない弾幕がランダムに襲ってきた。

(くっ!？ヤバイコレは避けねえ：)

なんとか避けていたが、ひとつの弾が俺に避けられない角度で飛んできた。

「出海!俺を使え!!」

「ッ!!秋水頼むぞ!」

俺はもちろん今まで日本刀など持ったこともなく刀をバットのようにおもいつきり襲い来る弾めがけて振った。

スパンッ!!

『え?』

秋水を除く全員が状況が掴めず振った本人の自分ですら訳が分からなかったなぜなら：

（…すごい出海さん。チルノちゃんの弾幕を…）

「アタイの弾幕を斬るなんて…アンタ何者よ!？」

「秋水これって…」

昔テレビで日本刀の特集がやっていて、そのテレビでは刀は太刀筋が重要らしくどんな名刀でも素人の太刀筋なら竹を斬ることすらも難しいらしい。

もちろん俺だって素人だ、なのにコレは…

「これが俺こと、秋水の能力。」

「ありとあらゆる物を切断する程度の能力だ。」

第十話「秋水の能力」(後書き)

そろそろ大学のテストがちかづいてきますが、がんばります！

第十一話「決着！バカVSバカ」(前書き)

今回主人公かなり鬼畜です。

第十一話「決着！バカVSバカ」

「ありとあらゆる物を切断する程度の能力だ。」

「す、すげえよ！ただいつも寝てるちゃんぽらんじゃなかったんだな！」

「ははは、もっと誉めていいんだぜ！」

今まで秋水に対して若干疑いの念を持っていたがそんな些細なことを吹き飛ばす程の出来事だった。

「ってことで、あきらめな！チルノとやら俺も無駄に子供を痛めつける趣味はないからな」

「くっ、一回斬ったくらいで調子に乗るんじゃないわよ！」

氷符「アイシクルフォール」

チルノは動揺しながらも次の一撃を放ち、鋭利な氷の氷柱が俺達めがけて襲ってきた。

「その攻撃真ん中が手薄だぜ！全部斬り捨ててやる！」

俺達はもつとも弾幕が薄い場所見極め、弾幕を斬り捨てながらチルノが行る場所まで走り抜けた。

「よおさつきはよくもやってくれたな…」

「く、離せバカ！」

「バカにバカっていわれたくありません」

俺はチルノの場所までたどり着き、逃がさないために肩をがっかり掴んだ。

いい年の男が少女の肩をつかみながら剣幕な表情で睨んでいるのだ。こちらの世界じゃなかったら間違いなく警察に通報されているだろう。

「お前の弱点は知ってるぜ能力者！！少し頭冷やしな！」

「なっ!？」

ドボンッ！！

俺はチルノをおもいっきり湖に放り投げた。

この秘策を使っただのは俺にある確信があったからだ。

（能力者といえど海では泳げない。ならば海がない幻想郷では真水でも効果があるんじゃないかな。）

しかしマンガの知識はこの世界では通用しないらしい。

ピキッピキッ

「はあ？」

湖が真夏にも関わらず氷はじめた。

そして：

「アンタよくもやってくれたわね！でも、サイキョーのアタイにはきかないわ。」

「なん…だと…力抜けたりしないとは奴は本当にサイキョーなのか…？」

「つーかさっき俺りボン取るとき何もなかったじゃねーか。」

「それを早く言え！」

これではマジで手詰まりだ。なにかほかにアイツになにか特徴はないか？ なにか：

「ハッ！！」

その時出海に電流走る。

「…チルノさんアンタやっぱりサイキョーだ。

俺達じゃとても適わないだから俺等をチルノさんの子分にしてくれ。

」

「はあ？ ちょ、ちよっと出海！ 何言って」

しかし秋水は俺の表情を見て押し黙る。

「やっとアタイのすごさが分かったのね！ 仕方ないわね、あんた達今日からアタイの子分よ！」

チルノはさっきまでとは打って変わってない胸を張って、俺等を指

差し満更でもないような表情になっていた。

バカで助かった。

「そこでチルノさんお願いがあるんですが…？」

「ん？お願いってなに？」

「さっきの湖を凍らすのもう一度見せてくれませんか？」

「しょうがないわねよく見ておきなさいよ！」

チルノが後ろを振り返った瞬間

（く、かかったな？めが！俺がお前の下につくわけねえだろ。）

俺は秋水を鞘から抜き、刀身を反転させた。

（峰打ち位は受けてもらうぜ！泣きやがれ？！！）

「…出…さ…あぶ…」

ふと横を見ると最初にいた場所で大ちゃんがなにか叫んでいる。戦って随分移動してしまったので遠くて声が聞こえない。

（ははぁーん読めたぜ大ちゃん。あのバカに危険を教えようとしてるんだな…だがおせえ！！）

俺が刀の峰をチルノめがけて振り下した瞬間。

ツルツ

俺の世界が反転していた。

そして俺は落下する前に見た。俺が踏み込んだ場所によく見ると…

カエルが氷漬けになっていた。
しかもあちらこちらにたくさん。

「な、なんでだぁぁぁー！！」

ドゴン

鈍い音と共に俺の意識はブラックアウトした。

第十一話「決着！バカVSバカ」(後書き)

感想お待ちします。

第十二話「人里へ…そして腕相撲大会開催!!」 (前書き)

感想アドバイスあったらよろしくお願いします。

第十二話「人里へ：そして腕相撲大会開催!!」

不思議な夢をみた。

それは現実というはあまりに臆気で：
幻想というにはあまりに：残酷だった。

夢の中では一人の男が体中を血で真っ赤にしながら泣いていた。

その男は大きな桜の木に、もたれかかって眠っているであろう女性を守るかのように背中を向けて幽鬼の如く立っていた。

辺りを見回すと男と女性そして大きな桜の木、そして：数え切れない程の死体が無惨にも辺りに転がっていた。

男が何かをポツリとつぶやく。

「…ごめん ●△○：守りれなくて…ごめん」

「ッ!!」

そこで視界に光が差し込んできた。

「大丈夫かゝ出海？」

「出海さん…」

「アタイがサイキョーすぎて悪かったわね!!」

今のは…夢？それにしてはあまりにもリアルで鮮明に覚えている。

（あの男…）

「あの、出海さん頭大丈夫ですか？」

「頭？…ツア!!」

頭には森近さんにもらったタオルが包帯代わりに巻いてあり、ズキズキと痛む。

（そうだ俺は…）

今までの出来事を思い出し、そして腕時計を見ると昼過ぎになっていた。

「ヤバ！早く人里まで行かないと、野宿になったら妖怪のエサになっちゃうじゃねえか！」

頭の血が抜けたおかげか当初の目的を思い出し、前のトラウマでとにかく日が暮れる前には人里に着こうと出発しようとしたが、

「人里って…どっち行けばいいんだっけ？」

先ほどの頭を強く打ったショックで道を忘れてしまった。

「しかたないわね！子分達のめんどろはアタイが見てあげるわ！あんた達ついてきなさい！」

「ちょ、ちょっと待てよ！！！」

「は～眠たい…」

チルノがさっさと出発しようとするので俺等も続こうとするとクイクイと服を引っ張られた。

「あ、あのチルノちゃんちょっと抜けてるところあるから…本当は私が行ければいいんですけど友達と用事があって…チルノちゃんのことよろしくお願いします。」

この時俺は大ちゃんは本当にいいお姉さんになるなとしみじみ思った。

（はあー大ちゃんがもう少し大きければなくほっとかないんだけどな…）

「？」

「じゃあな大ちゃん！」

「さいなら」

「じゃあ行ってくるわね大ちゃん！」

「はい秋水さんと出海さんお気をつけて。チルノちゃんあんまり迷惑かけちゃだめだよ？」

こうして大ちゃんと別れ短い間だが、新しい旅仲間ができた。

少年、刀、？妖精移動中……

「さぁ人里に着いたわよ!!」

「着いたわよじゃねえよ!! お前普通に真っ直ぐいけば10分か
らねえじゃねかよ!」

「うるさいわね、着いたんだから文句いわないでよ!」

「くーかぁ…くーかぁ…」

湖を出発してからチルノがここを曲がれば近道と自信満々に言うの
でついていくと、1時間歩いてもまったく着かず、秋水は刀に戻り
俺のベルトにささって寝てしまった。

一端湖に戻り、真っ直ぐいくと10分もかからず人里に着いてしま
った。

「だいたいなあ!!…ハァー腹へったな」

今まで我慢していた空腹が襲ってきて、じゃべる気力がなくなっ
てしまった。

よくよく考えると今朝アリスの家をでてからなにも食べてない。

「でも金もないしなあ…ラーメン食べたい」

「ねえ！？あれなにかしら！！」

「ん！？」

よく見るとすごい人だかりができてガヤガヤと騒いでいる。

「あのーこれなにかのイベントですかね？」

俺は近くにいたおじさんに聞いてみた。

「ああ腕相撲大会だよ。」

「腕相撲？」

「ほら右の部の決勝をやってるだろ。」

そして人だかりの真ん中にはひとつのテーブルが置いてあり、熊のような大男とチャイナ服のような民族衣装をきこんだ赤い長髪の髪
の女性が腕を組み腕相撲の体制に入っていた。

「さあ決勝戦用意はいいですか？それでは…レディ…ゴッ！！」

アナウンサーが開始を告げると2つの腕に力が入る。

（すげえ…なんであの姉ちゃんがあんな大男と張れるんだ？）

ドゴンッ！！

「決まったあああ！！右の部優勝は女王、紅美鈴選手！！三連覇達成に近づいたあああ！！誰か左の部で女王の三連覇をそしでできる挑戦者はいるのかあああ？」

「すげえだろ？美鈴ちゃんは強いからなく兄ちゃんも左の部で参加したらどうよ？まだ左の部は受付やってるぜ！」

「なんか賞品出るんツスカ？」

「たしか1位は金一封…」

「おい秋水、チルノ！！大会出場して優勝すんぞ！飯たらふく食うぞおおお！！」

決して負けられない戦いが始まった。

第十二話「人里へ…そして腕相撲大会開催!!」(後書き)

うまく伏線回収にできるように頑張つて書きます。

第十三話「血戦!! 腕相撲大会」 (前書き)

夏休みに早くならないかなあ…もつと書きたい。

感想もらうといつもテンションが引くくらい上がっています！

第十三話「血戦!! 腕相撲大会」

どうもみなさん。

この暑い陽気をいかがお過ごしでしょうか？

私こと紅美鈴ほんめいりんは今日負けられない戦いをしています。

それは…腕相撲大会です！私は妖怪なので人間にはそうそう力では負けません。人里には鬼やお嬢様のような吸血鬼はめったに來ないので、ここは私の輝ける場所、ステージなのです。

「しゃおらああ優勝すんぞ！お願いしまあああす!!」

あちらから外人らしい少年が大きな声で気合を入れて受付をしています。

しかし私は負けられません。なぜなら…

大会前日…

「美鈴、今年も腕相撲大会優勝期待してるわよ。」

「はい、咲夜さん任せてください。今年も軽く両方優勝してきますよ！」

「ならいいけど…わかってると思うけどコレも仕事だから、両方優勝して紅魔館の財源確保に協力してちょうだいね。もし…しくじったら…」

咲夜の手にはいつの間にか銀色に光るナイフが握られていた。

「わ、わかってます！わかってますからナイフだけは！」

「そう…じゃあ明日頑張ってね美鈴。」

咲夜さん笑顔が怖いです…

回想終了……

「よし、がんばるぞ！！生きる為に！！」

腕相撲のチャンピオンにそんな事情があるなんて全く知らずに一方俺達は…

「なんで俺しかエントリーしてないんだよ！チルノはいいとして、秋水なんで出ないんだよ！？」

「だって…俺こんだし…」

すると秋水は暑苦しい黒いコートを捲り上げると白くて細いまるで女性のような腕があった。

「え？マジコレ？プツ、アハハハハハ！！！」

「出海、笑うなんてしつれいでしょ！！アハハハハハ！！！」

チルノと俺は秋水の細腕をみて大爆笑してしまった。

「…ったく、いいんだよ俺は使われる側なんだから！力関係ないの！」

「はあ：わかった俺が1人で行っていくよ。」

俺はやっと笑いが収まり、1回戦目の準備体操に入った。

「鶴岡出海さん、至急リングテーブルに来てください！対戦者がお待ちです。」

「お、笑ってて気づかなかった。じゃあ秋水、チルノ行ってくるわ。」

「出海！アタイのかおにドロをぬるんじゃないわよ！！」

チルノが大きな声で出海を送り出している時秋水は不安げな表情で出海をみていた。

（出海は確かにガタイはいいけど…優勝までは…）

秋水の不安要素は2つあった。

1つ目は先ほどチルノとの初対面で凍らされた右手のことだ。凍傷にこそなっていないし、闘うのは左手なので心配ないと思うがやはり違和感があるのではないか…

2つ目は出海の腕力だ。いくら鍛えてたとしても所詮甘い外の世界で今まで生きてきた人間だ。優勝するなんて不可能に近いんじゃないかと…

「さあ続いての出場者はなんと外来人だああ！！」

(さて…出海お前は…)

「さあ、お2人ともよろしいですか？それでは…レディ…ゴッ！！」

ドゴンッ！！

審判の声とほぼ同時に周りに大きな音が響き渡った。

「き、決まったあああ！！出海選手、相手選手を瞬殺だあああ！！」

「なっ！！」

「さすがアタイの子分ね！」

観客の歓声のなか出海が秋水とチルノの場所へと戻ってきた。

「出海…お前…」

「言ったる優勝してくるって、なんたって俺の握力は70キロあるんだぜ！」

秋水はなんにを言っているのか分からなかったが出海がただのホラ

で優勝と言っていないことはよくわかった。

ドゴンッ!!

ドゴンッ!!

「おらあああバドミントン部の握力なめんなあああ!!」

※バドミントンはスポーツ別腕相撲2位だそうです。1位はちなみにテニス

その後の勝ち続けて

「くらえ!ずっと練習し続けたスネーク○イト!!」

ドゴンッ!!

ついに俺は決勝へと駒を進めた。

「やっぱり相手はあの姉ちゃんか…」

「出海大丈夫か?かなりバテてるじゃないか。」

相手を見てみると余裕しゃくしゃくで観客に笑顔を振りまいている。

（今の状態じゃあ勝てる気しねえ…万全でもあの姉ちゃんには…なにか、なにかないか？）

俺がなにか策を考えようとしたら：

「美鈴！！けっしょうなんてすごいわね！でもアタイの子分も負けてないわよ。」

「はい、楽しみにさせていただきます。では行ってきますね！」

チルノがチャイナの姉ちゃんと親しげに話していた。

「おい、チルノ！あの姉ちゃんと知り合いなのか！？」

「美鈴は紅魔館の門番だからよく遊んでるわ！それがどうかしたの？」

紅魔館がどこにあるのか、なんで門番なのに遊んでいるのかはこの際置いといて…

「なんか苦手なものとか嫌いなものはないか！？何でもいいんだ！」

「んゝ嫌いかしらないけど、よく門番で居眠りしているとメイドにナイフなげられてるわ。」

絶対ツツコまねえ、絶対にだ。

…その時はツツコんだら負けな気がした。

「サンキューチルノ！あとで俺のバックにあるシゲキックスやるぜ
！！」

そして俺は決勝の舞台へと向かって行った。

第十三話「血戦!! 腕相撲大会」(後書き)

余談ですが

出海の握力の数値は自分の握力の数値です。

感想やアドバイスあったらよろしくお願いします！

第十四話「決着!?!美鈴VS出海!?!」(前書き)

夏休みまだか…

第十四話「決着!?!美鈴VS出海!?!」

ワー!!!ワー!!!

歓声が響き渡る。

その歓声はいま中央のテーブルで腕を組んでいる2人に注がれていた。

1人は先ほど右の部で優勝し、3連覇間近の紅魔館の門番紅美鈴ほんめいりん

もう1人は幻想郷に訳が分からないまま迷い込んだ外来人鶴岡出海つるおかいずみ

今2人の戦いが始まろうとしていた。

「さあついに決勝です!!勝つのはどちらか!?!今始まろうとしています!」

オー!!!オー!!!

アナウンサーが大きな声で観客を煽り熱気は最高潮に達しようとしていた。

「それでは…レディ…ゴッ!!」

グッ!!

2つの腕に力が入りプルプルと震えながら硬直する。

「さすがここまで勝ってきた選手同士の戦いです!! お互い一步も譲りません!」

「グギギイイイ…やっぱり強いな…」

「確かに人間にしては手ごわいですが私の敵ではありません!」

さっきまでの均衡がじょじょに崩れはじめ美鈴の腕が俺の腕に覆い被さる形になってきた。

「おおおとこれは決まってしまうか!?!」

勝負の動きにアナウンサーが敏感に反応し実況に熱が入る。

「くそ…チクショウ」

「これで終わりです！」

美鈴の腕に更に力が入り出海の手の甲がテーブルにつきそうになる。

…今だ！！

「あ！？メイドさんがナイフ持ってます！すごい形相でこっち見てるぞ！」

「ひいひい！咲夜さんお許しを…」

パタン

美鈴の腕がテーブルに倒れた。

「き、決まったあああ！！優勝はなんと外来人の鶴岡出海選手！」

ワー！！ワー！！

アナウンサーの実況とともに観客から歓声が一気に上がる。

「ありがとう、みんなありがとう！！」

「ちょっと、咲夜さんなんてどこにもいないじゃないですか！！反則ですよ！」

俺が観客の声援にしていると美鈴から抗議の声が上がった。

「あゝ勝ちゃあいんだよ勝ちゃあゝ
そもそもそっちは妖怪なんだからこれくらいのハンデは当たり前だろ！？」

「グギギイイイ…やっぱり納得いきません！再戦を要求します！」

美鈴がこちらを指差し再戦を要求してきた。

「なに…これ!？」

今しがた来たばかりの女性は状況を把握できていなかったが瞬時に周りの声援や空気になにが起きたのかを理解した。

「そう…美鈴…負けたのね。」

女性は自分の中の静かに怒りの炎が燃えるのを感じていた。

「とにかく再戦ですリターンマッチです!!」

美鈴が抗議の最中に俺は観客の中にある人物を見つめた。

「あ、メイドさんだ!」

「またそんな嘘を…もう騙されませんよ!」

トントント

美鈴の肩をだれかが叩く。

「ちょっといま立て込んでるんで後にしてください！」

トントント

「あーしつこいですね！私は優勝しないと咲夜さんとお嬢様に半殺しにされるんです！！」

トントント

「お、おい美鈴後ろ…」

トントと肩を叩かれた手を美鈴は払いどけ、ついに後ろを振り返った。

「だからトントントってしつこい…です…」

後ろにはメイド姿をした女性が笑顔で立っていたが誰がみても怒っているのは明白だった。

「美鈴…負けたの？」

「い、いえいえ！相手が反則してきて」

「もう一度聞いわ…負けたの!？」

「…はい」

美鈴はこの世の終わりのような顔で声を絞り出していた。

「ふう仕方ないわね。次は頑張るのよ。」

「さ、咲夜さん!!」

美鈴が涙を流しながら咲夜というメイドに飛びつこうとした瞬間

「なんて…私が言うと思った!」

美鈴を囲むように大量のナイフが現れた。

「ギャー」

「すこし頭冷やしていらっしゃい!」

メイドはまるで瞬間移動したかのように一瞬で姿を消し串刺しにな

った美鈴が残っただけになった。

「お、おーい美鈴生きてるか？」

俺は恐る恐る串刺しになった美鈴を覗き込むと

「あー咲夜さんに帰ったら殺される。帰らなくても殺されるけど…
鶴岡出海！！覚えましたよ！次は純粋なバトルで決着をつけましょ
う！では！！」

まるでさっきまでの事がなかったかのように美鈴はダッシュして去
って行ってしまった。

「幻想郷やっぱり怖い…」

俺はすこし慣れてきたという考えを改めることを決意した。

第十四話「決着!?!美鈴VS出海!」(後書き)

今回主人公若干空気でした。

感想、アドバイスあったらよろしくお願いします!

第十五話「子供達を搜索せよ!」? (前書き)

やっと夏休みだああ!!

感想あったらよろしくお願いします。

第十五話 「子供達を搜索せよ!？」

「ハッハ! こいつが幸せの重さだぜ!」

「アタイかき氷食べたいわ!」

「任せんしゃい、俺の寛大な精神でおごってあげよう!」

「バカか…」

俺とチルノが袋の中の賞金をジャラジャラとさせていると秋水が呆れた顔で俺達をみていた。

「おい出海、日も暮れてきたしまずは宿を探すのが先だろ。」

確かに秋水の言う通りだ。人里といえど野宿は現代っ子にはかなりキツイ。

「よし! まずはや、」

「おーい君達!」

俺が話そうとすると遠くから俺達を呼びながら走ってくる人がいる。

「誰？」

俺が秋水に問いかけると俺と同じく「誰？」という顔をしていた。

「おいチルノお前は、」

「けーね！！」

俺がチルノに質問し終わる前にチルノは小走りで走ってきた女性に飛び込んでいった。

「おーチルノこの暑さで大丈夫か？」

「うん、アタイさいきよーだから！」

「あ、あの…」

「あ、すまない、まずは自己紹介からだな。私は上白沢慧音だ。かみしらさわけいね 普段は人里の寺子屋で先生をしている。

チルノ達妖精や妖怪にもたまに読み書きを教えているんだ。」

「俺は鶴岡出海ッス外の世界から来ました。そこでこっちが、」

「秋水だ。刀の付喪神だよろしくな先生。」

「ああこちらこそよろしく。」

俺達是一通りの自己紹介を終えると慧音さんが俺達を追いかけてきた本題を話し始めた。

「出海君の試合見せてもらったよ！優勝おめでとう。それで私から提案なんだがもう宿は決まったのか？」

「いえ、まだこれからッスけど…」

「そうか!!」

なら私の家に泊まるといい！外人ならまだ慣れないから困惑すると思うてな。幻想郷について分からない事があったら教えてあげよう。どうかな？」

こんな美人でしかも性格もよくておまけに女教師、おまけに女教師。

※大事なことから2回言いました。

断る理由は全くない。

「はい、お言葉に甘えて慧音さんよろしく願いします!」

「よし!じゃあさっそく私の家に…」

「先生!!」

今度は中年のおじさんが息を切らしながらこちらに走ってきた。

「どうかしましたか?」

「先生…う、うちの息子と他の子供らが…森からまだ帰ってこないんです!最近夜雀が近くに出没してるっていうのに!!」

「わかりました。私もすぐに捜索に加わりましょう。

…悪いなしばらく出かけてくる。

家には勝手に入っていいからな。」

慧音さんが俺達に家の鍵を渡し、走り出そうとした瞬間俺はその肩を掴んだ。

「なあ!?!」

「先生…泊めてもらうのにタダっていう訳には行かないっしょ? 俺達も手伝うぜ!?!」

慧音が振り向くと秋水もうなずいていた。

チルノは疲れたのか秋水の横でウトウトして事態をわかっていない様子だった。

「…すまない。」

「いいってことよ! チルノ頼みます先生!?!」

「ちょ、ちょっと!?!?」

「おい秋水行くぞ!?!」

「言われなくとも!?!」

こうして俺達は夜の森へと駆け出して行った。

少年、刀搜索中……

「おーい誰かいなのか?」

「いたら返事しろー」

あたりを懐中電灯で照らしながら搜索するが全く人氣がなく、虫の
声だけが静かな森に響いていた。

「くそ、全然いないな…秋水そっちは？」

「同じく…人っ子1人いねえ。」

「そっか…ん？」

ラーラー♪

耳を澄ますとかすかだが歌声がとおくで聞こえてきた。

耳を澄まし改めて聞くと声が段々とこちらに近づいてきている。

「おい秋水なんか誰か歌って段々近づいてきているぞ！」

「バカ！その歌を聞くな！！！」

「へ！？」

秋水が言った時にはもう遅かった。

「あれ？懐中電灯の電池きれたのか？真っ暗だぞ！？」

あたりが急に真っ暗になり、近くにいるはずの秋水すら見えなくなってしまう。夜の森とはいえ月や星明かりで若干はみえるが今の状態は光一つない暗闇だった。

「なんだこれ！？秋水どこだ！！」

「フフフ♪鳥目になった気分はどうかしら？」

暗闇の中、誰だか分からない女性の声だけが聞こえる。

「チッ、もう来たのかよ…」

「秋水なんだ？なにが起きてんだ？」

「さっそくですけどその外来人さん。私お腹が減ってしまってあなたを最初に食べてもいいかしら？」

女性が笑いながら俺に問いかける。

「おい子供達はどうした?…あとアンタ何者だ?」

「フフフ♪子供達はまだ食べてないわあなたを食べたあとのデザートだもの。」

あと…私は夜雀、夜雀のミスティアローレイよ!!」

第十五話 「子供達を搜索せよ!？」 (後書き)

次回やっとな主人公の能力だせます!!

第十六話 「覚醒!?! 出海の能力!?!」 (前書き)

ついに主人公の能力の片鱗が…

第十六話「覚醒!?! 出海の能力!?!」

「ミスティ…なんだった?」

「ミスティア、ミスティアローレイよ!! なんだあとあと一文字が出てこないのよ!! この鳥頭!!」

「わからんものは仕方ないだろ。

第一名前がカタカナで覚えにくいのが悪い! 世界史に出てきそうな名前しやがってよ!! 鳥頭はお前だろ!!」

「な、なんですって!!」

「……」

このやり取りを秋水が口を出さずに傍観していたのは出海のこのやり取りでの目的をいち早く察したからである。

（出海はいま目が見えない状態だ。だから声で相手の位置を知ろうしているのか…だったらいいけど…）

秋水には不安しか出てこなかった。

「もー頭にきたわ!! くらいなさい人間!!」

ミスティアは言うど昼間にチルノと戦ったときと同じように必殺技のようなものを叫びだした。

声符「梟の夜鳴声」

(ちくしょうわかんねえ…)

ドンドン!!

歌声とともに弾幕の雨が出海を襲う。

「ツァ…イツテェ!!」

出海は先ほどの会話でミスティアの位置を把握していた。

しかしミスティアの姿が見えていないので避けることなど不可能で、何発かマトモにくらってしまった。

「フフフ♪私をバカにしたのだもの簡単には殺さないわ。」

「イツテェ…秋水!!」

「わかってるよ!!」

俺は秋水を呼び、刀の状態の秋水に小さく囁いた。

「秋水…いまは俺の目になってヤツの居場所を教えてくれ!! アレをやる…弾幕を斬る!」

「おいおいまじかよ…まだ一回しかできてねえし、それに今は目も…」

「…上等だよ!! やってやるよ…だから秋水力を貸してくれ!!」

「出海…ほんとアイツにそっくりだな…だからこそやっぱりお前はおもしれえ!! 聞き逃すんじゃないぞ!」

俺は真っ暗でなにも見えない状態での秋水の声はとても頼もしく聞こえた。

「フフフ♪話は終わったかしらそれじゃそろそろとどめね♪」

夜盲「夜雀の歌」

ドンドンドンドン!!

先ほどよりも強くそして大量の弾幕がこちらに向かって来るのを出海は感じていた。

「出海!! 俺が合図したら、おもいつきり音がするほうに振れ!! おもいつきりだ!!」

「なんで向かってきた弾幕を斬るんじゃ、」

「いいから! 俺を信じろ!!」

なにがなんだか分からないなか俺は音が聞こえる方向に秋水を構えた。

「あれ!? なんだこれ?」

先ほどまで目を閉じてても開けていても真っ暗だった視界に映像が入ってくる。

その映像には俺がこちらに秋水を構えて襲ってくる弾幕に備えている今の自分達の姿が映っていた。

（これはミスティアの視界か？）

まさしくそれはミスティアから見た俺達であった。

そして目の前にはミスティアがだしたであろう弾幕があり、俺達めがけて次々と向かってきていた。

「今だ！！ 出海！！」

「うおおお！！」

秋水の声で我に返り、映像を頼りに俺は秋水をおもいつきりミスティアめがけて振った。

「え？」

ミスティアは決まったと思っていた。服装も外人っぽいしなにより人間だ。それが…それが…

「化け物…」

ミスティアはそう呟くと森の奥深くへと消えて行ってしまった。

「お、視界が戻ってきたぞ！！秋水どうだ倒したか？」

「ああ：アイツじゃなくてそこらの木をな！」

戻ってきた視界で朧気ながら見ると、あたりの木々がまるでチェンソーで斬ったかのような鮮やかな切り口をして地面に伏していた。

「な、なんじゃこりやああああ！！これ俺がやったのか？」

「ほんと：とんでもねえよお前は：」

オーイ、オーイ

遠くで慧音さんや大人達の呼び声が聞こえる。

「出海、秋水、子供達は無事に保護したぞーおまえ達もでてこーい！」

「はぁ俺達なんの役にも立ってないな…」

「そうでもないだろ。」

秋水が溜め息混じりに呟くと俺が自信気に答えた。

「なんでよ…？」

「木材の調達には大いに役だったと思うぜ！」

「はぁ…疲れた…眠い」

「…さっきの事とか聞かないのか？」

秋水が少し遠慮がちに俺に聞いてきた。

「今日はもうたくさんだ！！帰って早く寝たい…」

「おなじく…」

俺達は慧音さん達がいる明かり目指してとぼとぼと歩いて行った。

第十七話「スペルカード」(前書き)

バイトが忙しくてなかなか書けない…

第十七話「スペルカード」

また夢を見た。

夢の中の男は前回とは打って変わり笑っていて、周りには桜の下で眠っていた女性と若い侍のような男性、そして…妖怪の賢者である八雲紫の姿があった。

4人は楽しいそうに笑いあい、夢だということを忘れてしまいそうなほどに和気あいあいとしていた。

（なんで…あれは…）

今はこんなにも楽しそうなのに、前回見たあの忘れらることのできない夢ではあんなにも血なまぐさい光景広がっていたのだろうか。

「…つづみ…いず…」

誰かが俺を呼ぶ声が聞こえる。

「出海ほら起きろ」

夢から醒め最初に目にしたのはいつも通りのやる気のなさそうな付喪神の顔だった。

「…あのさ…こうゆうのって慧音さんが起こしに来てくれるんじゃないの？」

「白沢ならチルノを湖に送ってくるってさ。」

「…そうかい、それより昨日は疲れて聞けなかったけどなんだったんだよアレ？」

昨日あった出来事が頭の中に蘇る。

秋水からでた斬撃、ミスティアの歌声で目が見えなくなった時に見たミスティアの視界。

すべてがまるで夢のようにフラッシュバックする。

「まあ落ち着け、白沢が帰って来たら話してやるよ。その方がわかりやすいだろうからな。俺口下手だし…」

少年、刀待機中……

ガチャ

ドアが開く音がしたかと思うと慧音さんがひょこりと顔を出した。

「ただいま、出海起きたのか！！もう起きて大丈夫なのか？」

「全然余裕ッスよ！！それより幻想郷や俺についてたくさん聞きたいことがあるんですが…」

「そうだな、では…なにかから話そうか？」

俺の頭に最初に浮かんだのは昨日自分が見たミスティアの視界についてのことだった。

「昨日：あの夜雀と戦ってた途中に夜雀の能力で視界を失った時に夜雀の視界が見たいのが急に見えたんッスけど：一体なんなんでしょうか？」

俺は恐る恐る聞いてみると慧音さんは真剣な顔で悩みながら1つの答えをだした。

「：おそらくそれは出海の能力じゃないかな？」

「はあ？能力ってチルノや秋水が使ってるようなのですか！？俺が！！いままでなんともなかったのに！？」

俺は自分がまさかあんな万国びっくり人間の仲間入りをしていたなんて聞かされてパニックになりかけた。

「おそらく：外の世界と比べて幻想郷は魔力や障気が高いからそれに出海の間々備わっていた能力が反応しなんじゃないかな？」

「マジか：俺にそんな力が：」

そんな外の世界なら電波で笑い飛ばせるような話も幻想郷ではマジである。

この話を聞いて信じてしまう俺自身幻想郷に慣れてきたんだなあと実感してしまった。

「じきに自分で思い通りに使えるようになるよ。まあまだ色々不明な能力っぽいけどね。」

慧音さんの話を聞きまるで自分がなんかのマンガの主人公になった

気分ですわられていた俺は次の質問を秋水に投げかけた。

「なあ秋水、おまえを振った時にでたアレはなんなんだよ!？」

「アレ? ああ斬撃のことか? アレはお前とのパスが繋がり始めただ
せたんだよ。もつと時間が経って繋がりが深くなればもつと強い
や、俺がいなくても斬撃がだせるようになるぞ。」

「マジでか!？」

「マジでだ!！」

コホンッ!!

俺が興奮していると慧音さんが軽く咳払いをし、話を戻そうとする。

「では出海私から君に質問してもいいかな？」

「うす!! 彼女ならいません!! 年上大好きです!!」

「いやいやそうじゃなくて…出海スペルカードは知っているか？」

「スペルカード?…」

「技を出すとき使うカードなんだが…」

俺はまったく思い当たる節がなかったが慧音さんの一言でチルノが持っていたカードを思い出した。

「あの必殺技を叫んでたようなカードの事ッスか？」

「そうだ！！今の幻想郷ではそれと弾幕を合わせて戦うのが主流になっている。妖怪や人間にいたるまで遊び感覚でやっているんだ。」

俺は秋水に軽く「どうして言わなかった？」とアイコンタクトをとったが秋水は「いや寝てたし…」と開き直り気味で答えた。

「で、そのスペルカードがどうしたんですか？」

「いや君たちはこれから旅をするのだろうか？なら『郷に入つては郷に従え』と言うだろう。是非スペルカードを作ってみないか？」

「スペルカードか…おもしろそうッスね！！よしぜひ教えてくださ
い先生！」

こうして俺はスペルカードをつくることになった。

まあまだ全然能力も不明だし、なんにもできないが頭の中ではすでに何枚ものカードを作り上げていた。めちゃくちゃカッコイイやつを…

「……はあ」

その様子を哀れんだ目で見ていた秋水には後で仕返ししようとして堅く誓い、幻想郷2日目の夜は更けていった。

第十八話「迷いの竹林」(前書き)

遅くなりました。

待ってた人はいないと思うけど次話です。

第十八話「迷いの竹林」

迷いの竹林。

あまりの竹の多さや竹の均一性から方向感覚が麻痺し人間はおろか妖怪までもが迷ってしまうと言われている幻想郷の竹林である。その中を歩く人影が3つ。

「竹しかないから今どこに行るのか分からんし…大丈夫かよ遭難したんじゃない？」

「まったく…お前が怪我しなきゃなあ」

「んだとこらあ！！」

人影の内の2つは物語の主人公であり突如として幻想入りした鶴岡出海とその相棒となった刀の付喪神の秋水である。

「ほら、なにしてんだー置いてくぞー」

2人より少し先にもう1人の人影の人物である藤原妹紅ふじわらのもこうが大声で2人を呼んでいる。

「まったく…こんくらい大丈夫だったのに先生は心配性なんだから…」

俺がぼやきながら妹紅の後を追った。

事の始まりは今朝にさかのぼる。

「はぁ？ ケガ？」

俺は先生が用意してくれた何物にも代え難い先生お手製の朝食を味わいながら先生の話聞いていた。

「そうだ、聞けば昨夜の夜雀からの攻撃以外にもチルノに腕を凍らされたとか。それだけのことがあったんだから医者に診てもらって損はないと思うが。」

（チルノの奴…余計なことを…）

先生は心配そうな顔で此方の表情を窺っていた。俺だって先生を心配させたくないし多少ではあるが体のこともいわれるとやっぱり気になってしまう。

（でも金と時間がな…）

病院といえはやはお金だってかかるだろうし通院ともなれば旅を中断しなければいけなくなってしまう。

「うーんどうするか…」

「ああお金と通院の心配はないぞ。」

俺が悩んでいると先生がまるで考えを読んだように俺が悩んでいた

ことに対する返答をくれた。

「え!？」

「迷いの竹林にある永遠亭という屋敷にはとんでもない名医がいてなあ。さらに迅速にしかも格安の治療費で治療してくれるんだ。」

「じゃあそこに行けば、」

「待て!! 出海!!」

俺がはやくも永遠亭に向かおうとすると秋水がいつになく真剣な声に俺は足を止めた。

「なんだよ…マジな顔して」

「名前ちゃんと聞いてなかったのか? 迷いの竹林は妖怪ですら迷ってしまう場所、土地勘がない俺達が行っても遭難するのが目に見えてるだろ。」

「そこは心配ない。私の知り合いで迷いの竹林の案内をしてるやつがいるんだ。アイツならきつと案内をしてくるだろう」

「マジカ」

「マジだ」

コンコンッ

だれかがドアを軽くノックする音が響き渡る。

「おいーす慧音！腹減っちゃってなんか食べさせてくれー！」

粗暴なセリフながらもどこか気品ある声が玄関先から聞こえてきた。

「噂をすればなんとやらだな…紹介しよう彼女が先ほど話していた
竹林の案内人…藤原妹紅だー！！」

第十九話「蓬萊の民」(前書き)

今回まったく話が進んでません。

コメント、感想などありましたらよろしくお願いします。

第十九話「蓬萊の民」

ピシヤッ

襖が乱暴に開けられ今俺達の目の前には赤いモンペのようなものを穿き、特徴的な長い白い髪をリボンで留めた俺よりも少し年下に感じる少女が現れた。

「ん？お客さんか？私は藤原妹紅よろしくな。」

妹紅と名乗る少女は俺と秋水を一瞥するとニカッと笑いかけ食卓から玉子焼きをひよいとつまみ、口の中に放り込む。

その仕草を見てどことなく魔理沙に近いタイプではないかと俺は感じた。

「ちょうどいいところに来たな妹紅。来てばかりで悪いが案内を頼まれてくれないか？」

「ん？いいよ。案内するのはその2人？」

「ああ外来人でなあ。昨夜子供を助けてくれた時にケガをしてしまったなあ…心配だから永遠亭で診てほしいんだ…」

この時俺は心配そうな先生の顔をみて、こんなお嫁さんがいればなあ…と自分の体の心配よりも将来自分が結婚できるかどうかということの方が心配になるという危機感ゼロな状態だった。

「よし！じゃあ行くか！！2人とも私についてきな！」

妹紅が俺が最後に食べようと残してあった玉子焼きの最後の一切れを口に放り込み立ち上がった。
くやしいのお…くやしいのお…

「はい！ここまでが回想であつた。」

「出海…誰に言つてんだ？体診てもらうついでに頭も診てもらつたらどうだ？

いきなりだが俺は眠いんで寝るわ。じゃあね…」

だんだんと声が小さくなったかと思うと秋水は刀の形に戻ってしまった。

「ふざけんなよ！！自分だけ寝やがつて！！もう4時間近く歩いてんだぞ、見ろ！足が棒のようだ！！

…ん？なんだアレ？」

目を向けた先には竹で半分顔を隠しながらこちらを伺う、ピンクのワンピースをきた女の子だった。そして何よりも特徴的だったのが…

「み、耳が…ウサ耳が、生えてる…」

ピョコピョコと耳が動く様はとても作り物とは思えない。

「どした？はやくしッ！！てゐ…お前がいるってことは…」

先頭の妹紅がこちらを振り返り、ウサ耳の少女を見ると急に顔が陰しくなっていた。

「あらあら？久しぶりに外に出てみればろくでもない奴にでくわしてしまったわ。

お使いはレイセンに任して、やっぱり部屋でネットゲーやってた方が良かったかしら？」

妹紅よりもさらに前から新たなる第三者の声が聞こえてくる。

気品あふれる声ながらもそのセリフ自体はとても気品とはかけ離れたものだった。

「それはこっちのセリフだ…蓬萊山輝夜！！（ほうらいさんかぐや）」

第二十話「かぐや姫!?!詐欺兔!?!俺変態!?!」(前書き)

今年中に後もう一回くらいは書き上げたいなあ。

第二十話「かぐや姫!?!詐欺兎!?!俺変態!?!」

竹取物語

日本最古の物語といわれている作品で、その話はあまりにも有名な童話『かぐや姫』にアレンジされ現代でも語り継がれている。

はい、前置きはこれくらいにしてどうも出海です。

俺の目の前には竹林の中に長い艶やかな黒髪をなびかせ、豪華な着物を見事に着こなしている女性が対峙しています。

その姿はまるで御伽噺のかぐや姫のようです。

え?なんで敬語なのかって?そりゃあ:

「それはこっちのセリフだ!蓬萊山輝夜」

「あらあらうるさいわね:私は今から重要な使命があるのだからそこを退いてくれるかしら?焼鳥屋さん?」

「退くのはお前だ!!蓬萊ニート!!」

現在進行形で火花なが散ってるんですもの:怖いんですもの:

「あの:妹紅?そちらの方は:」

恐る恐る俺が妹紅に尋ねてみるとイラつきが収まらないながら口を開き始めた。

「アイツは蓬莱山輝夜：竹取物語を知ってるか？アレはアイツの話だよ：そして：私と父上の人生を狂わした女だ！！」

妹紅とその親父とのことは分らないが、

かぐや姫：確かにその姿は御伽噺のかぐや姫そのものだ。

しかしその妹紅との会話を聞いていると、とても姫とは思えない。

「はあ：退かないなら力づくでいくわよ！！」

輝夜と呼ばれる少女がしびれを切らしたのか、遠くにいてもわかるくらいの霊力が彼女から込み上げてきていた。

っべーな、ってゆうかなんでお姫様があんな力持ってるんだよ：マジっべーわ：

「上等だ！！今日は2ケタは殺してやる！！」

妹紅も触発されてか、霊力が一気に膨らみ、その霊力が燃え盛る炎へと形を変えていった。

「ちょ、ちょ、ちょ俺を巻き込むな！！死んじやうから！！ポックリ逝っちゃうから！！」

俺が慌てて逃げようとする就先ほどのウサ耳の少女がコッチコッチと手招きをしていた。

「ほらほらコッチコッチだよww」

若干何かやな予感がしたが、背に腹は代えられない。

俺はウサ耳の少女元へと全速力で走って行った。

ドゴーオン、ドゴーオン

「うおおおお!!」

「ゴオ…ZZ…ゴオ…ZZ…」

爆音が轟く中、俺はチビリそうになりながらも走っている最中、俺の腰では刀の形に戻った秋水が爆音をモノともせず、イビキをかいていた。

秋水…てめえいい加減起きろや…塩水に浸けるぞ…

「ウヒヒヒWWよくついたね兄さん。さあ私が安全な場所まで連れて行ってあげようWW」

なんとかウサ耳少女の場所までたどり着くと、ウサ耳少女がまるで天使のように見えた。

しかしなぜかあの笑みをみるとイヤな予感が頭をよぎる。

青年、刀（爆睡）、ウサ耳、移動中……

ウサ耳少女に連れて行かれた先はとても竹林のとは思えないほどの豪華な御屋敷が姿を現した。その御屋敷はあまりにも竹林には異質なもので最初は幻かと思ったほどだった。

「すげえー豪華…どんな人が住んでるんだろ…」

この時はまだ俺はあのゲーマー姫がこの屋敷の主であることを知るのはまだちょっと先の話……

「助けてくれありがとう。えーと名前は？」

「ああ因幡てゐだよ。さあここら辺でいいかな？…ニイイイ」

てゐと名乗る少女が先ほどとは違い素っ気なく答え満面の笑みを見せると、今まで以上に不吉な予感が全身を駆け抜けていった。

「キヤアアアア！！助けて鈴仙！！変な男に襲われる！！」

「……はぁ？……ッ！！」

一瞬間が真っ白になったが直ぐに自分の置かれた状況を理解した。

バンッ

俺の頬をナニかが掠り赤い血が一筋滴る。

「アンタ…今すぐてゐから離れなさい！！」

音がした方を恐る恐る見るとてると同じくウサ耳があり、高校生の制服のようなものを着た俺と同一年くらいの長い髪の少女が殺気立って俺を睨んでいた。

「もう1度だけ言うわ!! てゐから離れなさいこの変態!!」

「え? え? ええええええ!!?」

第二十話「かぐや姫!?!詐欺兔!?!俺変態!?!」(後書き)

はい、久しぶりの投稿です。感想、コメントお待ちしております。

第二十一話「絶望の淵」(前書き)

今回短いです!!ごめんなさい。

第二十一話「絶望の淵」

「え？へ、変態ってどういう……？」

「動くなって言ってるでしょ！！変態！！」

今まで生きてきていろんなことがあったが見ず知らずの少女に変態呼ばわりされたことなどあるはずもなく、しかも2度も言われた……鬱だ……シニタイ……

「さあ……てゐを離しなさい……」

ブレザーのようなものを着たウサ耳の少女はまるでレイガンを発射しそうなポーズをし、殺気立ちながらこちらに睨みをきかせている。

「な、なに言ってるんだよ！？お、おお俺がこんな少女を襲うワケないだろ！！ほら、てゐちゃんもさっきのは違いますって言わなくちや……」

俺は動揺して声に泣きが入りながらてゐに訴えかけると……

「ツプクク……助けて……鈴仙プクク……」

てゐは表情を手で隠し泣いているように見えるが実際よく声を聞くとセリフから笑いがもれていた。

「やっぱり…ッ!!…さては今朝の新聞に載っていた妖怪狩りね!」

「は? 妖怪狩り? 逆に今狩られそうなんだけど…」

「問答無用!!」

パンツ

「うわ!! 本当にレイガンでた!?!」

先程の頬を掠めたものは見えなかったが今回ははっきり確認できた。指の先端からまるでレイガンのようなものを発射すると、威嚇射撃ではなく俺の頭を狙ってきて避けるあまりおもしろい尻餅をついてしまった。

「てる早くこっちへ!!」

「ウワーコワカッタヨ」

てめえおもしろい棒読みじゃねえか…

「頭きた!! 秋水起しろ! アイツらちょっと可愛いからって調子に乗りやがって…少し痛い目にあわせてやる…」

「なんだよ…あと2日は寝させろよ…ん? アイツは…」

決意を決めると秋水を鞘から抜き、構えをつた。秋水はまだ状況が

飲み込めていないようだったがそんなの関係ない。

「おいそこのバニーガールズ!!」

我ながらヒドいセンスだと思ったことは秘密である。

「…なによ? 見逃してあげるからさっさと消えなさい。…変態」

うわぁアレは人を見る目じゃねえよ…ゴミを見る目だよ…

「冤罪で、はいそうですかって許せるほど人間できてないんでねえ…意味分かるよな…?」

「へえ…てゐがダメだから次は私ってワケ? いいわ相手してあげる。変態さん…」

こちらの空気を察したのかあちらも臨戦態勢に入り空気が一気に張り詰める。

先程てゐに鈴仙と呼ばれていた少女は紅く大きな瞳を鋭く光らせる。

(プクク…まさかここまで面白くなるとは…そういえばアイツが持つてる刀どっかで見たような…)

「秋水いくぞ!! アイツが俺の能力の犠牲者第一号にしてやる!!」

「ふぁぁぁ…フア…イト…」

…大丈夫かコレ…?

第二十二話「狂気の瞳」(前書き)

クリスマス？ ナニソレおいしいの？

第二十二話「狂気の瞳」

パンッ、パンッ

袋を破裂されたような軽い音が竹林に響き渡る。

「ハッ！！こんなもんかよ！！」

「ぐう…ちょこまかと…」

鈴仙が苦虫を噛んだような表情で指先から弾丸を連射する。

（なんで？…なんでこんなに当たらないのよ…？）

（よし！！見えるぞ奴の視界が…これだけ使えば勝てる！！）

時は少しさかのぼって今朝…上白沢邸にて…

「はぁ？どうやって能力をだしたかったって？」

「そうだ。もし緊急事態で能力を使わざるを得ない場合の時は、夜雀の時はどうやって能力を発動させたかを思い出してよくイメージしとけ。」

秋水がぼんやりと中庭を眺めながら独り言のように呟く。

「そんなこと言ってもなあ…あの時は必死だったからから…目が見えなかったくらいしか…」

「まあその時の感じを忘れずにいるこった。」

バンツバンツ

鈴仙から放たれた弾幕は出海を捉えることなく虚しくも竹に命中する。

（なんで？アイツは弾幕ごっこ素人じゃないの…？）

鈴仙にも焦りからか額から汗が滴り落ちる。

（やっぱり…あの時と同じように自分の視界を塞げば…相手の視界が見える！！怖いから片目しか瞑らないけど…）

もし当たってなければどうしようかと思って、パンツが濡れてしまいうそうになりながらも出海の視界には片方が自分の視界もう片方が鈴仙の視界が映っていた。

「さあ…次は俺のターンだ！！くらえ！！」

出海はポケットの中から一枚のカードを取り出した。

斬符「五郎入道正宗」

余談だがこのスペル名は昨晚考えて作ったカードの一枚で、我ながらいい出来だと自負している。

ホントはもっとカッコイイのが良かったが、秋水に本気で止めてきたので仕方なく変更した。

なぜ斬符「ナイトメアブレイド」ではダメなのか今でも疑問である。

「ッ!!」

出海から秋水を一振りし、現れた斬撃は鈴仙目掛けて襲いかかる。

「こんなバカ正直な攻撃なんか撃ち落としてあげるわ!!」

バンッバンッ

鈴仙が斬撃に数発の弾丸を浴びせる。

「…え…?」

しかし鈴仙が放った弾丸は逆に出海が放った斬撃に真っ二つに切断されてしまった。

「ハッ!! 見たか!! 俺にはお前の視界も見えてるし、攻撃の威力でも俺のが上回っている!! さあわかったら大人しく謝罪をし永遠

亭という場所に案内してもらおうか…う、さ、ぎ、さ、ん？」

「そうね…私はアナタを誤解していたよね…」

「やっとわかってくれたか！！そうだよ俺は、」

「もう…アナタをただの外来人とは思わない。もうアナタをただの人間とは思わない。」

「…へ…？」

そう答えると鈴仙は大きな瞳を閉じ、さっきほどとはまったく違う雰囲気になりまるで決意を固めたような表情で目の前で呆けている出海を凝視していた。

「…へ…？」

「アナタさつき私の視界が見えるって言ってたわよね？だったらやってみなさいよ…」

鈴仙の目蓋が上へと持ち上がり、紅い瞳が露わになる。

「この狂気の瞳を視て狂わない自信があるのらだけどね！！」

その瞳は先程とは段違いの…

赤い

朱い

紅い

瞳
だ
っ
た。
。

第二十二話「狂気の瞳」(後書き)

感想と言う名のプレゼントお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4054u/>

ついに俺も幻想入り！

2011年12月19日13時46分発行